



# 南九州及び南西諸島域の「地域活性化の中核的拠点」として

～奄美群島を舞台とする教育、研究を通じて地域貢献を目指す～

特集

措置法ができ、現在の奄美群島振興開発特別措置法（奄振法）に至るまでおよそ60年を経過しています。

一昨年、改正奄振法が制定されましたが、この中で奄美群島12市町村が一丸となって奄美の経済、文化、自然、産業をしっかりと整えていこうという奄美群島成長戦略ビジョンを策定しました。

奄美群島有人8島、大きくは5島の人々が、特に奄美の今後について目標とすること、期待すること、そしてどうしても達成したいことを考え、やはり奄美が経済的に自立していくためには航空運賃、航路運賃、そして農産物等を内地や都会に輸送する輸送コストを改善していかないことには、奄美群島の自立的経済発展にはつながらない、また成長がかかるといふことで、奄美群島成長戦略ビジョンを策定したわけですね。

これにより、LCC（格安航空会社）が就航し、また定期便も格安割引が導入され、運賃低減化が実現しました。

こうした状況において奄美が目立っている今後の方策としては、現行奄振法を有効に活用しながら、より多くの人々にこ来島いただくこと、そ

して同時に、一昨年制定されたまち・ひと・しごと創生法を重層的に捉えながら奄美の持つ優位性を広く国内外にPRしていくことです。

それは、とりもなおさず先人が作り、残してくださった自然、自然の中から生まれた生活、生活の中から生まれてきた八月踊りや島唄などの特異な文化、芸能。これをしっかりと奄美の有効な資産、資源として活用し、経済活性化の一助にすることです。また実際、そういう形で今、奄美は躍動しつつあると、一面自負しているところですね。

## 地域課題への取り組み

前田 今、奄美群島の発展に対する非常に熱い思いをお聞かせいただきまわっているこの島々を、鹿児島大学としても、大いに発展させる方向で、全学を挙げて協力していければと思っています。

鹿児島大学は、文部科学省の平成26年度「地（知）の拠点整備事業」いわゆるCOC事業に採択され、かこしまCOCセンターを設置しました。

鹿児島県特有の地域課題について、地域防災・医療、観光・国際事業、エネルギー、農林畜産、水産といった部会を作り、自治体や産業界からの相談に対応できる体制をとっています。

また教育面では地域・マインドを備えた人材養成のプログラムも準備しており、その中には、奄美地域の発展に向けての教育プログラムも大学として整えつつあるところですね。そういう意味で、地域貢献マインドを持った学生をぜひ奄美にも送り込みたいと思っています。

それから大学による地域創生推進事業、これはCOC+（プラス）という事業ですが、これについても鹿児島大学は採択されています。学生のインターンシップ、就職支援策の拡充、それから地元就職の促進などをこの中で進めたいと思っています。インターンシップや就職支援という面でも、奄美群島を視野に入れた学生の支援に力を注いでいきたいと思います。

## 地域と大学の関わり

朝山 われわれは今日に至るまで、島嶼という環境においては人的資産の蓄えが最も肝要なことと位置付けてきました。鹿児島大学には平成16年に奄美に大学院人文社会科学部研究科のサテライト教室を作っていただきました。そ

して私どもが合併する直前の平成18年3月13日には奄美市（当時の名瀬市）と、また合併後の平成26年11月には奄美群島広域事務組合と包括連携協定を結んでいたできました。そして昨年の4月には国際島嶼教育研究センター奄美分室を設置していただきました。こうした連携を通して、私ども行政はもとより、住民も鹿児島大学を身近に感じています。

人的資産に関連しますが、鹿児島大学からのインターンシップの学生さんが、一昨年は二人、昨年は一人、私どもの地域の事業として「知の地域おこし連携事業」に来てくださり、観光、地域の産業、文化、福祉などについて職員と一緒に頑張って頑張ってくださいました。

やはり、知的資産、地域を育てていただいている鹿児島大学の皆さまに、奄美の現状について客観的観点から教えていただきながら、われわれも自覚し自立していかなければならない。そういう意味で連携を深めることは、奄美の人的資産、人材育成にとって大変重要なことであると考えているところです。

司会 一方で大学も奄美群島地域には大変恩恵を受けている部分がありますね。

司会 本日は鹿児島大学の教育研究および社会貢献活動、とりわけ本学の奄美群島拠点の取り組みと成果についてお伺いするため、前田芳實学長と朝山毅奄美市長にお越しただいています。大学と地域の関係や地域が大学に期待することなど、忌憚のないお話を伺えればと考えています。

まず本学の将来像について、第3期中期目標・中期計画との関連を踏まえて前田学長から説明をいただけますか？

する地域人材育成の強化、大学の強みと特色を活かした学術研究の推進、また、地域ニーズに応じた社会人教育や地域連携の推進、さらに、機能強化に向けた教育研究組織体制の整備などを挙げています。

とりわけ鹿児島は、南北600kmの広い海域・地域を有しますので、この南北600kmを鹿児島大学のキャンパスとして位置付け、教育・研究ならびに地域貢献を展開していきたいと思えます。

鹿児島大学 前田 芳實 学長  
奄美市 朝山 毅 市長

## 奄美群島の状況

前田 鹿児島大学は、平成28年度から平成33年度までの第3期に、地域貢献型の大学として機能を強化して、南九州及び南西諸島域の「地域活性化の中核的拠点」としての大学を目指します。

具体的には、グローバルな視点を有

朝山 奄美群島は昭和28（1953）年12月25日に日本に復帰しました。その翌年、議員立法で奄美群島復興特別



奄美の高倉（鹿児島大学 郡元キャンパスに再建）

前田 そうですね。今、お話がありましたように、この南北600kmの鹿児島県全域は、非常に生物の多様性に富んで、文化、芸能などの面での多様性もありますし、その長い歴史の中で培われた文化を、大学としても大切にしながら教育、研究に力を注ぎたいという思いがあります。

今、学長として、県下全域の43市町村を訪問して、各自自治体の首長さんから直にお話を聞かせていただき、鹿児島大学への期待、とりわけその地域に鹿児島大学としてどういうお手伝いができるのか、というところを伺っています。特に、地域医療の問題、過疎地における教育の問題です。鹿児島大学からは、それぞれの地域で学生の教育の場としてインターンシップをさせていただきたい

前田 鹿児島大学は、総合大学の特色を生かして5つの大きなプロジェクトを進めています。島嶼、生物多様性などを含む環境、食と健康、水、エネルギーです。この5つのプロジェクトは部局の枠を超えた全学的な研究活動で、鹿児島県全体の課題であるとともに、全人類的な課題にもなっています。

奄美群島についてもオール鹿大による総合的な調査・研究体制を強化して、地域との共同研究・共同事業に取り組んでいるところです。研究会やシンポジウムには、国際島嶼教育研究センターの教員をはじめ、法文学部、水産学部、農学部、理工学研究科、総合研究博物館など各学部の教員が参加しています。

今年、その研究成果の一部が『奄美群島の生物多様性』、『鹿児島島の島々』それから『鹿児島島の食環境と健康食料』という本にまとめられました。奄美『奄美群島の生物多様性』は、奄美固有の生物層を扱っており、これからの世界自然遺産登録に向けて研究面からのサポートになるのではないかと期待しています。

また『鹿児島島の島々』は奄美群島だけでなく鹿児島島の28の有人離島を中心に幅広くまとめていますが、このように島を対象とした地域の学術研究の取りまとめは、全国でも非常に珍しい

というお願いをしています。

地域おこしについても、お互いに連絡を取りながら、鹿児島大学が持っている知的な力をどう活用し、どういう形で協力を進めるかという連携の話も具体的に進めているところです。特に、鹿児島県は全国でも非常に優れた農林水産物を生産していますので、その第6次産業化をどうしたらいいのか、食品加工技術をどうしたらいいのか、また地域で眠っている伝統的な食材をどういうふう nationally 発信できるかという話も伺っていますので、大学としてもぜひ協力できればと考えています。

司会 奄美群島の自治体として何か期待することはありますか？

朝山 先程も申し上げましたが、地域に知的資産をお貸ししたきたいということに尽きると 생각합니다。奄美群島は有人8島、大きく分けて5つの島から成っていますが、それぞれ言語が違い、慣習も違い、大きく言えば文化的な要素もそれぞれ違うという状況です。北の大島本島笠利地域と南の与論地域とは慣習、言語、風習は全く違うわけです。奄美の来し方400年は沖縄の世2000年、薩摩の世2000年と言われています。沖縄の文化や慣習も、鹿児島島の慣習や文化も取り入れながら、その中においてオンリーワンの



市民向けの「奄美の生物多様性観察会」の様子

のではないかと思います。

それから『鹿児島島の食環境と健康食料』ですが、南北600kmにまたがる鹿児島には、他の地域にない素晴らしい食材があるというところを紹介しています。

食の面では、食と健康の研究チームが、鹿児島島の「黒膳」を開発しました。黒豚や黒毛和牛、黒酢、黒糖など、高い機能性を持つ「黒」食材で構成された食材を持って「黒膳」というお弁当、お膳をこしらえる提案をしています。これには奄美の食材も取り入れ

文化、芸能、伝統を形成してきたわけ

です。多種多様な動植物が育つ山を中心にしながら、それぞれの集落があり、そこに生活が育まれて、そこからそれぞれ異なる文化や言語、風習、慣習が生まれた。そういうものが今日に至り、道路環境、情報などすべての条件がある程度フラットになって遜色のない環境になっている。

ここにおいて今ようやく私もはれ方を振り返ってみて、先人の素晴らしいことを知り、現状を踏まえて将来の進路を考える、いわば岐路という位置にあるのではないかと思います。北海道も奄美も沖縄も遜色なく、リアルタイムの情報が時間的な短縮も含めて実現している時代です。文化や歴史を守りつつ、腰を据えて次の時代に飛躍する基礎を作らなければいけない。そうした時期のような気がしています。

そのためには、人的資産、人材育成ということが必要になってきます。残念ながら奄美は仕事の間やそれを有効に生かしている組織、あるいは仕事が少ないという状況にあります。その中で鹿児島大学のOB・OGさんが我が市の職員に40名くらいおりまして頼もしい限りですが、その職員が中核をなし、過去、現在、未来をしっかりと見据えながら、企画、立案の仕事などに取り組んでいるところ

ています。

今後は新鮮で良質な素材に高付加価値をつけて、新しい食産業を展開することが重要になってくるのと考えから

朝山 食については奄美の素朴なものに逆で、東京へ行っても珍しがられています。長命草やアザミにしても、私の子供の頃は浜に行けば蹴散らして、食べもしなかつたものです。そういう私どもが知らなかつた、知りえなかつたことを学術的、専門的に教えていただくことが一つ一つの支援になりますし、宝として顕在化しつつあるのではないかと思います。

#### 奄美群島広域事務組合との連携協定

司会 自治体との協力、連携としては、先程お話にもありました奄美群島広域事務組合との包括連携協定が締結されたところです。

前田 これは鹿児島大学と奄美群島広域事務組合との包括連携協定の下で、鹿児島大学の知的資源を奄美群島の発展と振興に役立てることを目的としています。主な連携項目として、新産業創出、基層産業の振興、人材の育成、地域防災対策などを取

#### 奄美群島拠点の意義と役割

司会 本学は地域活性化の中核拠点として奄美群島拠点を新たに整備して、昨年、国際島嶼教育研究センター奄美分室ができました。

前田 これは、鹿児島大学の奄美群島の教育、研究の拠点として位置付けるということで、昨年4月に開設いたしました。奄美には素晴らしい自然をはじめ、文化の多様性、それから伝統的産業があります。そういうものを土台にしなが、鹿児島大学として、新しい社会の構築に向けた研究、教育の場として奄美拠点を位置付けたいと考えています。これから大学としても人的配置を拡充して、研究チームも体系的に整えて、市民の皆様とともに奄美群島拠点を育てていけたらと思っています。

朝山 奄美分室では、河合昇生、高宮先生を中心として、この2年間で約20のシンポジウムや会合を開いていただきました。奄美の自然遺産や環境問題について、住民の皆さんや子供たちに広く分かりやすく講義して下さっていますので、私自身もありがたく思っています。

\*鹿児島大学国際島嶼教育センター 河合昇教授・高宮広土教授

り上げています。

朝山 鹿児島大学の人的資産の育成、そして地域貢献など、私どもにとっては大変ありがたいことです。せっかく鹿児島大学とこのような包括連携協定を結んだのですから、それをいかに実のあるものにしていくかが重要なのではないかと思っています。

奄美市には県立高校が3校ありますが、毎年400名くらいの生徒のほとんどが進学、あるいは就職していく。帰ってくる方は、生産年齢層の25、6歳くらいから60代の間の60〜70名。最終的に300名くらいが減っている。市の人口も合併して4万9千人だったのが今4万3千人。6千人くらい減ったということなんです。そういう意味で奄美大島5市町村は名瀬を中心として、交通事情、情報の状況、生活環境、仕事の環境をほとんど共有する域圏なので。

体力の弱いわれわれ自治体が、どこかの村が、どの町が、と競争ばかりしていたのではないかな。お互い共通の理念をもって、お互い補完し合いながらやっていくのではないかな、ということ、奄美大島5市町村が奄美大島総合戦略会議を立ち上げ、それについて奄振法を生かしながら、新しい地方創生法案を重層的に捕まえて広域的に事

業を申請したところ、国から多くの事業に理解をいただきました。地域を生かして、と言いながら、ヒト・モノ・カネ、資源が乏しいわかれわかれです。カネは生めないが人の資産は作っているかもれない。ですから、モノという資産、カネという資産はないけど、人の資産は作っているのではないのか。そういうことを目指してやっていきたいと思っています。

### 少子高齢化、過疎化に向けて 「発想力と応用力」

司会 少子高齢化、過疎化は全国的な問題だと思いますが、奄美の状況はいかがでしょう？

朝山 奄美が日本復帰した頃は人口23万と言われていました。現在は12万弱、およそ半減しました。もちろん少子化、高齢化しています。高齢化率は奄美市においては低い方ですが、25%を超えています。4人に1人は65歳以上の年齢構成になっています。他の市町村に行くともっと高い。12市町村の中には40%、50%くらいのところもあると思います。一方、合計特殊出生率は奄美12市町村のほとんどが全国の100傑に入っています。1位が伊仙町の2・81。5、10番目に徳之島町、天城町。この3町は全国で10位に入っ

てほしいと思います。

前田 奄美もこれから高齢化が進みますが、高齢の方を対象にした新しいビジネスも可能なのではないかと思えます。宇検村かどこかの若い人だったと思います。地域の高齢者が作った野菜を軽トラックで集めて回って、名瀬の市場を持って行って売ってあげる、そして売った収益を生産者のおじいちゃん、おばあちゃんの郵便口座に振り込む、という仕組みを作っている若者がいました。これは高齢者の喜びにも通じますし、またそういう人を支える若者が育っているということでもあります。高齢化社会の一つの新しいビジネスモデルかもしれません。

朝山 小さな集落で、庭で野菜を作っているおじいちゃん、おばあちゃんがあります。近隣の人はみんな同じ野菜を作っているので売り先がない。そこで、野菜を回収して回る、少量でもいいんです。それを中央市場の職員が買い取る。おじいちゃん、おばあちゃんの生きがいになりますね。

司会 それが、今お二人が言われた応用力、発想力ですね。

前田 その環境、その場に合った具体的なものを使って新しい何か、コ

とおり、さらに瀬戸内町、喜界町、和泊町、奄美市、龍郷町が100位以内に入っております。それでも伊仙町に入っても人口が減っています。

司会 人材が流出しているんですね。

朝山 そういうことだと思います。やはり人口が自然減しているというメカニズムをいかにするかということは、仕事づくり、雇用の場づくり、まちづくりというまさに地方創生の原点です。こういう状況を一つの現実として捉えてやっていかなければならない。高齢化していることも事実ですし、少子化していることも事実です。高齢化することが決して悪いこととは思いませんが、その中でこれまでになく福祉行政の量も高まってきつつありますし、自治体の体力がそこで問われていると思います。待機児童対策、少子化対策、高齢化対策を含め、今後はこれらが行政の大きな課題になっていくと思います。そのためは、仕事の場づくり、雇用の場を作っていくことがそれを解消する大きな要因になっていくと思います。

前田 そうですね。やはり若い人が地域に残るということは大事なことで、地域にある資源や素材で自ら何かを作り出す、という意識がしっか

コミュニティを作り出していくということですね。

朝山 それは本当に大事なことであります。奄美はマリンスポーツが盛んになりました。われわれはもともと当然のことと考えていましたが、それを企業化して仕事にしているのは都会から来た人たちです。地元にいるとあまり意識がなくて、触発されて気づいたという面がありました。都会から来た人がむしろマリンスポーツの穴場やポイントをよく知っています。

そういうことを自覚し、認識すれば、トータルしてそれぞれのエリア、地域で新しい仕事を起こし、働く場所の確保、資金の循環、所得の向上、安定・安心な生活環境づくりにつながってくるはずですね。これほど奄美がメディアや多くの人々に注目されることは、いまだかつてなかったことですので、世界自然遺産登録へ向けてもぜひご協力をお願いしたいと思います。

### 鹿児島大学の学生への期待

司会 最後に、朝山市長から鹿児島大学の学生に対する期待をあらためてお願いします。

朝山 鹿児島大学は旧制七高です。私は大島高校の寮にいましたが、寮歌の



前田芳實（まえだ よしざね）鹿児島大学長  
昭和44年 3月 鹿児島大学大学院農学研究科修了  
（昭和52年3月 農学博士取得（九州大学）  
鹿児島大学助手農学部  
平成 6年 7月 鹿児島大学教授農学部（～平成21年3月）  
平成21年 4月 国立大学法人鹿児島大学理事（～平成25年3月）  
平成25年 4月 国立大学法人鹿児島大学長（～現在）

り根付いた人がその地域に帰っていくということが大事だと思います。そこに仕事があるから就職するというのではなく、育った場所に昔からある良い資源を元に、何か新しいビジネスを起こす、あるいは新しい地域社会を作る材料にするというようなマインドを持った人を育てることが非常に大切だと思います。

これからの地域創生に向けた大学の人材づくりは、やはりそういう応用力というか、自ら進んで何かを作り出すという姿勢を持った人を地域に送り出すということが大切だと思います。そこに雇用があるから住むというのではなく、小さなことでもいいので、何か自分から雇用を作っていくという人を育成することが、これからの大学教育には求められると思います。

原点は七高の校歌でした。そういう中で誰もが憧れた旧制七高です。そのOB・OGが奄美市役所の核を成して、中心的存在になっています。鹿児島県下の行政すべてにおいて中核を成す人材を輩出している総合大学として、ぜひとも先人に倣った活躍をしていただき、連続と続く人的資産を維持していただきたいと思っています。

前田 実は私の青春時代、大学時代のスタートは奄美群島にあるのではありません。今振り返ってみてそう思います。というのは、大学1年の夏休み、徳之島の辺土野という集落にサトウキビの栽培の実習で3週間ほど滞在したことがありました。ちょうど今頃の炎天の中でサトウキビを30cmほど切る、そして30cmほど赤土を掘り起こして

朝山 まさにおつしやる通りで、受動的に、仕事があるから就職するというのではなく、それだけ高邁な知識と経験を持った若い人であれば、新しい企業を起こす、起業へのチャレンジをする、またそのような環境づくりや、そういうアクションを起こせるような地域が求められるのではないかと、あの面では思います。

自然が一つの観光資源となり、より多くの皆さんの雇用場所となり、そういう資金循環が起こる。そういう視点で、高度な技術や学問を生かしていただければと思います。役所や農協、漁協などもありますが、それほど大きな雇用は生み出せない限られたパイですので、自然環境を生かしてちょっとした発想で何かできないかを考える、そういう人が増える面では思います。

100mくらい続く畝を作ったんです。そこで農業とはどういうものかを勉強して、農学部の私としては大変なめになりました。

やはり現場に出て汗水垂らして働くということは大切なことで、ある意味では一生の宝だったなと思います。奄美は私の青春の原点と思っております。奄美に対しては大変親しみを抱いています。学生たちにはやはり現場をしっかりと体験してもらいたいと思っています。奄美がそのような体験学習の場を鹿児島大学の学生たちに提供していただけならと希望しています。

司会 本日はお忙しい中、朝山市長、前田学長、ありがとうございます。

司会 中島大輔 鹿児島大学学芸補佐（広報担当）



朝山毅（あさやま つよし）奄美市長  
昭和44年 3月 拓殖大学農学部卒業  
平成 6年12月24日 笠利町長（～平成18年3月19日）  
平成18年 6月 3日 奄美市助役  
平成19年 4月 1日 奄美市副市長（～平成20年4月30日）  
平成21年12月 1日 奄美市長（～現在）